第９章　中途視覚障害者への点字学習指導

早期に点字の学習を始める場合は、触運動の基礎的な技能などを、発達の段階に応じて学習の中で関連付けて習得することができるため、比較的スムーズに点字学習指導に取り組み、触読能力も着実に伸びていくことが多い。しかし、中途視覚障害者の場合は、墨字での学習が進んでから点字学習に切り替えることになるので、早期に点字の学習を始める場合とは、異なった配慮が必要である。特に、年齢が上がるにつれて、触読への取組をはじめ、様々な面で困難を伴うようになり、触読ができないケースもみられる。このように、今まで使用していた墨字体系から点字への取組に移る場合には、乳幼児期からの取組とは異なったプログラムが必要になる。

ところで、墨字から点字へ切り替える際に考慮すべきは、児童生徒の視力や視野が最も大きい要素であるが、これらは個人差が大きく一概にその数値を示すことは難しい。大切なことは、いくら墨字を読むことができても学習の効率が悪い場合は、学習するための情報源として墨字を活用しているとは言えないことである。例えば、小学校の中学年になっても１分間に 100 文字を下回るようでは学習の遅れが目につくようになり、点字への切り替えを考慮する必要があろう。その適切な判断は、指導に当たる教師の重要な専門性の一つでもある。

第１節　中途視覚障害者への点字学習指導の工夫と配慮

中途視覚障害者の場合、視覚障害になった年齢やそれまでの学習状況などによって、点字学習への導入方法が大きく異なってくる。第１章第２節の３にも述べたように、早期に視覚を活用することができなくなった視覚障害者の点字触読については、特に小学部第１、２学年のあたりで飛躍的に伸び、触読のための手指の操作も小学部第３学年あたりで完成するとみられている。また、中学部第１、２学年あたりにも触読が飛躍的に伸びる時期がある。しかし、中途視覚障害者の場合は、点字の学習を始める時期が一人一人異なっているので、触読の伸びなども一様ではない。したがって、点字の学習を始める時期によって、指導内容や指導方法を工夫することが大切である。このように、中途視覚障害者の場合は、個々の実態に

よって対応に違いがあることに留意する必要がある。

中途視覚障害者への点字学習指導に当たって特に重要なことは、いかに点字学習への動機付けを行うかということである。

小学部段階から点字学習指導を行う場合には、常用する文字として点字を学習の中に位置付け、その大切さを理解させることは比較的容易である。中学部や高等部以降の中途視覚障害者の場合は、視覚障害の受容の問題も大きな要因となるので、この点についての配慮が必要である。また、墨字による学習がほぼ定着した段階で点字へ切り替えることになるため、点字触読が思うように進まないこともある。したがって、中学部や高等部以降の段階から点字学習指導を開始する場合は、点字学習を行う目的意識をしっかりともつことができるようにすることが大切である。このことがその後の点字学習の進み具合にかなり影響する。通常は、点字学習の開始年齢が高くなるほど触読の習得に時間がかかるので、点字学習の意欲を高める取組が、年齢が高くなるにしたがって重要になる。点字という新しい文字に取り組んで、それが使いこなせるようになるにつれて喜びを感じることは直接的な動機付けとなる。点字のもつおもしろさを知ることが学習の意欲につながることや何かを書いてみたいという思いが点字の学習に結び付くことなども考えられる。点字を習得するメリットは大きい。自分で点字のメモを書くためには、点字を読めるようになることが必要である。また、親しい友達と手紙を交換することが楽しみとなる場合もある。インターネットからの豊富な点字データを点字ピンディスプレイで読んだり、音声でも読むというような楽しみも可能となる。さらに、各種の試験を点字で受験するというのも重要な目標設定である。

このように、中途視覚障害者に対する点字学習指導を行うに当たっては、学習への動機付けと、興味や意欲を持続できるようにするための工夫と配慮が必要である。

第２節　中途視覚障害者への点字学習指導の方法

中途視覚障害者への点字学習指導の場合も、点字触読への導入については「第４章」、点字の書きの学習への導入については「第５章」の方法が基本となる。しかし、中途視覚障害者の場合は、既に墨字での学習を経てきているので、点字の読みや書きの学習の順序や方法については、それぞ